

# 全久院報

松本市深志 3-7-50 電話 0263-36-3211

## 前住職の密葬に際してご理解賜りありがとうございました

昨年中は大変お世話になりました。本年もよろしく願いたします。

昨年は東堂、全久八世大興俊勝大和尚が11月28日に遷化し、12月3日に全久院と倉科家による密葬を執り行いました。全久院は大本山総持寺の直末寺のため、葬儀に際しては導師を本山にお願いする都合上、本葬を執り行うには段取りに時間がかかるため、ごく内々の密葬という形式に



させていただき、新聞記事に掲載させていただいたとおり檀家の皆様には外での焼香のみとさせていただきました。にもかかわらず200人以上の皆様にご焼香をいただき、心から感謝申し上げます。

東堂は昨年初頭より体調を崩し、7月頃から流動食ものどを通りにくくなり、点滴が始まりました。10月には床擦れができ、相沢病院に入院、床擦れの膿を出す手術を受けましたが、点滴のみのため次第に衰弱し、3回の危篤を乗り越えましたが、11月28日3時35分遷化いたしました。痛みを訴えることもなく、本当に静かな瞬間でした。

寺に戻った体を家族皆で拭き、着物に着替えました。数ヶ月の点滴のみの体は痩せ細ってはいましたが、蠟のように透き通っていました。目は落ちくぼみ、あばら骨の出た体はガンダーラの苦行する釈尊のような、人生という荒波を乗り切り、安らぎの



地にたどり着いた、厳しくそして温かい顔になっていました。泣きながらおじいちゃんの体を拭き続けた子供たちが「お父さんは泣かないの?」と聞きました。「お父さんは子供のころからおじいちゃんと一緒にだった。キャッチボール、スキー、いつも遊んでくれた。坊さんになってお経や声明を叩き込まれ、法事はいつも二人。お父さんが息すること、動くこと、運動をすること、お経を読むこと、坊さんであること、全ておじいちゃんがお父さんに叩き込んだ通りに体が動いているだけ。おじいちゃんがいなくなってもお父さんの全てがおじいちゃんだから、おじいちゃんはお父さ

んからいなくならない。だから悲しいとは思えないでいるんだ」と答えました。

密葬は教区のご寺院様、特に全久院に関係の深いご寺院様（法類といいます）約30人に読経、瑞松寺様に密葬師をお勤めいただき、総代様、全久院茶道部（即心会）役員、親戚、合せて約70人にお参りしていただきました。お参りいただいた皆様の心の中にも、熱燗のお酒を含め様々な「俊勝」の思い出が生き続けているとお話をさせていただきました。

松本中学時代に始めた柔道。松本50連隊での連隊旗手補佐。戦争後松本警察署での柔道指南。表千家長野県支部の創設。昭和39年住職就任以来の活躍。なんといっても檀家さんとの密な付き合い。常に「死ぬ気でやる」を口にしながら、全力投球をしてきました。曹洞宗宗門、地域の仏教会でも会長などを歴任し、大きな役割を果たしました。



その功績に報い、皆様にもお参りいただけるよう、本葬は後日執り行います。本山より導師をお迎えする都合上、6月に執り行う予定で本山と打合せを行っています。皆様に後日ご通知いたしますので、ご焼香賜りますようお願いいたします。

### 境内散歩「馬頭観音」

山門の手前の左側に、小さな祠があります。総代長を御勤めいただいている松尾様のご先祖さまが寄進して下さった、馬頭観音様の祠です。

馬頭観音とは「馬の頭をもつもの」という意味のサンスクリット語で、インドの神話にその起源が描かれています。「昔2人の悪魔がインドの最古の聖典(ヴェーダ)を盗んだ。梵天はヴィシュヌに取り戻すように要請した。ヴィシュヌは馬の頭に変身し、東北の海中に入ってこれを奪還した」というのが馬頭観音さまの起源といわれています。ですから馬頭観音は天馬のように縦横無尽に駆け巡り、あらゆる障害を乗り越え目的を



達成する観音さまということになります。自らの解脱を求めず、衆生を救済するとの請願をたて、悪と戦い駆逐し、衆生の苦悩を断ち切ることを使命としました。そこで人々は、馬が牧草を飽くことなく食べるように、人々の煩惱(迷い)を食い尽し、迷い苦しむ衆生を救済する観音

様として信仰しました。

しかし、馬頭観音を説く教典は少なく、中国では7世紀中ごろ翻訳された経典に初めて登場しました。その姿は頭上に馬頭をおき、眉間に第三の目が縦につき、顔が3面あり、2・4・8の臂(3面8臂が多い)を持つ、威怒王(怒り)の姿をしています。二つの手は印を組むか合掌をしており、他の手に棒・法輪・数珠・宝剣・えっ斧を持っています。この怒りの姿で手ごわい煩惱を駆逐するのです。全久院の馬頭観音さまは3面8臂で、頭上に馬頭が彫られ、柔和なお顔をしています。



日本では奈良の西大寺が最初の造像を行いました。寺の仏像の数は大変少なく、西国三十三霊場でも二十九番の丹後松尾寺にのみ像が奉られています。しかし庶民の間には農村の路傍に立てられた石仏として、畜類の守り仏や旅行の守り仏となり日本中に信仰が広まりました。縦横無尽に駆け巡り、あらゆる障害を乗り越え目的を達成し、自らの解脱を求めず、衆生を救済するために、悪と戦い駆逐し、衆生の苦悩を

断ち切る生き方をしたい、そんな生き方をしている人と共にいたい、そんな人に救ってもらいたいという当時の人々の思いが込められた観音様です。

## 「いらの会」大活躍

りらの会の活動が始まり3年ほどになります。初めはメンバーもどう活動してよいか五里霧中、全久院のお手伝いといってもどこにどんなお皿や、灰皿、茶器、掃除機などがあるか何もわからない状態でした。

最近はお寺にも慣れて戸惑いもなくなりました。昨年一年間の葬儀の数の3分の1をりらの会のお手伝いにより全久院で行うことが出来ました。

以前は私たちの身近にどこにでもあった近所どおしのちょっとしたお手伝い(お勝手の仕事、買い物、掃除など)は、人と人の優しい繋がりの中で交わされていました。そんなお手伝いをするのが目的で作られたグループです。法事や葬儀を通じて知り合い、そんなお手伝い出来るようになったら、というのが目標です。

りらの会の活動が広がると、地域や社会を支えてゆく人間どうしが繋がってゆき、





暖かい人と人の繋がり核に全久院もなれると考えています。なお活動が広がり、人手が足りなくなってきました。全久院だけのお手伝いなら、という方も大歓迎いたします。ぜひ会員として登録ください。お手伝いのお礼は時給約600～800円くらいです。関心のある方はぜひお電話ください。お願いいたします。

## 喫茶コーナーを開設します

以前より「お墓参り後、すぐ帰らずにお寺でお茶でも一杯飲めたらいいな」と檀家の皆さんが話しているのを小耳にはさんでいました。寺の者だけでは人手が足りず実現出来なかったのですが、りらの会やお手伝いの方をお願いするようになって、それが可能になりました。



まずは昨年の秋彼岸の中日にために開きました。煎茶は無料、コーヒーは150円、抹茶は200円で、いずれにもちょっとしたお菓子が付きます。まったく宣伝や知らせなしで始めたので、この日は20人ほどが立ち寄り、お寺の中で、一息休んでゆかれました。

これからは春秋の彼岸の中日、お盆の13日と16日にオープンしようと思っています。広い本堂で、清々した空気の中でひと時の休息、お墓参りの後ご先祖様にふれあい、

心が和む瞬間になればと思います。どうぞご利用ください。

## 全久院の集い

**ご詠歌** 曹洞宗のご詠歌には検定があり、合格するとそれぞれの位がもらえます。今ご詠歌を習っている皆さんは6名。その内の4名の方が今年も検定に挑戦しました。すでに2回の検定を合格していますので、現在権正教導（ごんせいきょうどう）という教階です。昨年6月15日検定があり、見事4人の方同時に正教導に合格しました。



写真は指導していただいている東昌寺副住職さんに合格証を渡していただき、記念に撮った写真です。



左の写真のように、ここまでは検定も何人かで一緒にお唱えするなど比較的易しいのですが、これからの教階は少しずつ厳しくなります。皆さんも上の位を目指して、そればかりではなく、純粋にお唱えをしたいという方でも結構です、一緒にお稽古してみませんか。大きく息を吸って、お腹から声を出し、長く声を出し続けますので、「長息（長生き）」できますよ。ご

希望の方はお電話で全久院に申し込みください。お友達と一緒になら心強いと思います。お友達なら全久院の檀家の方でなくても結構ですご一緒にどうぞ。

**座禅会** 座禅の前にお話しする、「従容録（曹洞宗の座禅の手引書）」より今回は「第十八則 趙州狗子」のお話をします。

中国唐代を代表する禅の巨匠、趙州從諗（じょうしゅうじゅうしん）（778-897）は120才まで現役で弟子を導いた中国屈指の禅僧です。中国に1700あるといわれる公案の中で最も有名な考案です。趙州にある修行僧が聞きました。「狗子（犬）に仏性（仏のいのち）がありますか」趙州は「有」と答えると、修行僧は「おかしなことだ。考える力のない皮袋（ひたい）に仏性があるはずがないでしょう」。趙州は「この世の全てのものは仏性の表れだということをわからぬとはなあ」。すると他の修行僧がまた同じ質問をしました。趙州は「無」と答えました。僧は「全てのものに仏性があるというのに、無とは変なことを言うものだ」。趙州は「業識（因縁によって仏性が有であったり無であったりすること）の有るという在（ある）が体得できていない」と答えた。という問答です。同じ質問に答えは「有」となったり「無」となったり、ちんぷんかんぷんの禅問答です。禅問答というと、同じ質問に一見正反対に見える答えが返ってきます。ですからまさに典型的な禅問答です。

この問答には仏教のすべての教えが凝縮されています。狗子自体は「有」の存在です。つまり仏教の根本的な教え「縁起（全ての存在はこの大自然の条件と条件が重なって初めて存在として現れる）の法」によって存在しているのだから、狗子は仏法の説くまま存在しているから、仏性そのものであるから有と答えたのです。この「縁起の法」は次の3つのものから成り立っています。

第一は自然を認知する人間の側の五蘊〔色（体）、受（体の中の感覚する作用）、

想（感覚したものを想い、考えとして取り込む）、行（取り込んだ考えを形に表す）、識（形にすることで認識となって存在する）と、第二は認識される側の大自然である四大〔地（硬いもの）、水（液体）、火（熱）、風（気体）、空（それらのものをコントロールする自然の法則）〕。この1と2を連動させるのが仏の法で三法印（三つの法のしるし）です。第一は諸行無常（常に変化していて、固定的な実体はない）第二は諸法無我（なににも実体はないから執着するものもない）第三は涅槃寂靜（心の平安が訪れる）。このように五纏、四大、三法印、縁起の法により仏性の世界が現され、狗子は仏性として形を持ち現されたものということがわかります。

次に四諦〔苦（苦しみとは何か）集〔苦しみの原因〕滅（苦しみを亡くす方法）道（苦しみのない生き方をどうすべきか）という苦を除いていかに生きるべきかを説く教え〕と八正道〔正しい見（見方）、思惟（考え方）、語（言葉）、業（行為）、命（生活）、精進（努力）、念（意識）、定（統一された精神）〕によって、執着を離れ、小さなことに、そして最後には仏にも固執しない生き方を説いています。狗子に仏性があるかなどと、こじつけの、固執したものの考え方から抜け出す生き方を「無」という答えで教えたのです。

このように「趙州狗子」には、五纏、四大、三法印、縁起の法、四諦、八正道という、これが仏教の教えの全てといえる教えが全部尽くされています。犬は仏の法によってこの世に存在したと言うことから、仏性は有る（有仏性）。しかし、あるかないかにとられるような固執や、表面面の禅坊主臭さは生き方として必要ない（無仏性）。今この大切な瞬間を、自分として最大に生きるのみ、との教えがこの「趙州狗子」ということになります。仏の法は大変複雑難解で、いかなるものであるか見極めることは困難を極めます。そしてそれを自分の生き方として取り込んでゆくと口で言うことは簡単ですが、厳しい修行の末にかすかに見えてくるのが私たち凡夫には精一杯のところでしょうか。しかしあきらめずに一歩一歩進むしかありません。

**観音講** 観音講では最近新しく3人の方が入り、15人の仲間で、観音様への読経、ご詠歌、唱歌の合唱、精進料理と盛り沢山の活動をしています。新しい試みとして、お盆の施食法要の時、導師が入場する前に、ご詠歌をお唱えし、お唱えの中導師が入ってきます。また法要が終わり導師が退堂するときもお釈迦様の名をお唱えします。入堂や退堂の時の盛り上げに一役かっています。自分たちのお楽しみ、だけではなく法要にも参加しています。少しずつですが、寺の行事に関わってもらえるようになってきました。ともすると、お寺の行事はお坊さんだけが動き回る感がありますが、檀家の皆さんが活躍する、そんな場がもっとできれば、皆さんの意識も受身だけでなく、一歩踏み出す積極的なものに変わるのではないかと思います。

## 総代会ルーツを訪ねる旅

昨年10月4～5日愛知県豊橋市全久院を訪ねる研修旅行に行ってきました。全久院はもともと徳川譜代大名、戸田家の菩提寺です。松本城最後の城主の戸田光則（みつさだ）が廃仏毀釈を断行。その時の住職意龍和尚は道元禅師の御親筆「正法眼蔵 山水経」ほか6巻のお経（国の重要文化財）を豊橋全久院に



持って逃げ、法脈を引き渡し、松本に帰り、次に寺の什物を長持ち3個に詰め、大八車に乗せ、郷里の新潟出雲崎に難を逃れました。松本市の歴史にも大きく関わるこの一大事件、全久院の歴史を学ぶ研修として、現在法脈は切れてしまいましたが豊橋全久院を訪れたわけです。上の写真は戸田家歴代の党首の墓前での写真です。8年ほど前にも、山門の落慶事業の一環として豊橋を訪れ、現在は廃仏毀釈という歴史を共有し、歴史の大きな波に翻弄された寺どおし交流を再開しました。左の写真は中央が私で、左隣が現住職様と副住職様です。



また豊橋全久院の近くには有名な豊川稲荷がありますので参拝し、ご祈祷していただきました。こちらも豊川閣妙巖寺が正式な寺号で、曹洞宗の寺です。ご祈祷のお経の早さは私には着いて行けない程で、聞いてはいましたがお経も寺によって様々と感じました。

## 仏教ミニ知識

……………花祭りのお話しをします……………

松本仏教和合会（松本市の超宗派の仏教会）の恒例行事である「お花祭り」は毎年5月に開催されます。檀家の皆様のお宅にも托鉢させていただいています。日露戦争の慰霊のための行事の一環だったとのことですので、100年以上の歴史を刻んでいます。

もともとの「花祭り」は日本独特の祭りでした。初めは鎮花祭（はなしずめの祭り）から始ったとされています。花が早く散らないように、これを鎮めて落ち着かせる。つまり桜を米や稲と考えれば、稲穂が散らないように、稲の実がよく実るようにとの願いが祭りとなったわけです。桜が散る遅い早いを見て、秋の稲作の豊凶を定めようとしたのです。また、春から夏は疫病



がはやる季節です、疫病をはやらせる疫神や悪霊を防ぎ、追い払う祭りとしての要素も含まれていました。イナゴなどの害虫が生じないようにと、村の男女が踊りながら村境まで疫病神を送ってゆく「疫病送りの踊り」が各地にあったようです。昔の素朴な信仰や農耕儀礼として「花祭り」が日本の社会に定着していたのです。この民俗行事が仏教と融合しました。

それが灌仏会です。お釈迦様の誕生仏に水を注ぐ、誕生を祝福する法会のことです。この法会は中国から伝わりました。推古天皇の時606年陰暦4月8日、日本最古の灌仏会が催され、奈良時代には各地に広がり、平安時代以降仏教寺院の年中行事となった記録が残されています。

最古の誕生仏は奈良東大寺にあります。高さ45センチほどで右の東大寺大仏様の脇に安置されています。「日本書紀」によると、欽明天皇13年(552年)10月、朝鮮半島の百済の国、聖明王が釈迦仏の金銅像と灌仏の器具を伝えたといわれています。もともとインドで発祥した灌仏会が中国へ渡り、日本で発展し、広まったのです。



現在の東大寺の灌仏会は花御堂をもうけ、銅盤を置き、その中に誕生仏を安置します。その誕生仏に柄杓で甘茶を注ぎます。インドではお釈迦さまの誕生の時、天上の竜王が頭に甘露の法雨を注いだとの伝承があります。水を注ぐということはインドにおいてガンジス川での沐浴にも通じます。インドでは沐浴することで自分の体を浄化し、輪廻から解脱し、昇天できると考えていました。誕生仏へこの思いを託し、水を注ぎ昇天を、そして永遠の幸せを願ったのでしょう。

誕生仏は日本人の美的な好みに合わせ、質量ともに多様な形に発展しました。日本に伝わり甘露の法雨の代わりに甘茶を注ぎます。左は松本仏教和合会の誕生仏です。皆様にもおなじみの姿で、毎年甘茶を掛けていただいています。日本の仏教行事の中では一番華やかで、心が優しく、暖かになるお祭りです。このお祭りの裏



には、インド、中国、日本と伝わってきた長い歴史と、それぞれの国の信仰とが凝縮されています。何故か懐かしい感じがするのは、この歴史と信仰の悠久の流れからでしょうか。



## 茶道コーナー

父が始めた茶道を私の代で終わらせてはと、やっと最近重い腰を上げて、茶道関係の書物を読み始めました。まずは茶道の歴史を知らなくては。するとそこにはとてつもない複雑な世界が広がっていました。政治、宗教、文化、生活、そして人間関係が綾のように織りなされていました。

その一部をご紹介します。足利時代は中国との貿易が盛んになり、中国の絵や茶器を飾り立てる茶が流行しました。特に將軍足利義政は政治に関心がなく、借金してまでもこれらの名品を収集しました。数千点に及ぶ名品は東山御物と呼ばれ今日まで伝わっています。

織田信長の時代になると、貴族の茶は廃れ、大名の茶と庶民の茶が主流を占めるようになりました。信長は権力得ると茶道具の名品を集め、また戦争の功労者にはこの茶道具を与えました。国一つの功労が茶入れなどの茶道具一つ渡すだけという、今では信じられない価値を茶道具は持っていました。彼は茶道を政略の道具にしたのです。戦争に不可欠な武器などを仕入れたのが堺の商人で、彼らが経済力を持つと、庶民の茶が広まりました。ここで活躍したのが千利休の師匠、武野紹鷗でした。利休を含め多くの弟子を育てながら、中国の名品ではなく、「侘び」という日本独自の美感を育て、床の間には日本の禅僧の書を掛けるようになりました。

秀吉の時代はこの大名と庶民の茶が成熟期を向かえ、その頂点が千利休でした。利休の7高弟の一人がキリシタン大名の高山右近でした。宣教師も日本において茶道を勢力拡大に利用する中、右近は清廉潔白で信長から「高山はさながらキリシタン坊主だ」とも言われる程で、その人柄がわかります。禅に基づく茶道とキリスト教の教えの間で、右近の心の中にどんな葛藤があったかは想像に絶するものがあります。利休はキリスト教への迫害が強くなった時「表面は改宗したように装いなさい」と伝えたとされています。戦争が頻繁に起こり、死が常に眼前にある武将たちにとって、禅の思想に基づく茶道は心のよりどころとなったのですが、右近にとってはキリスト教信仰とまったく異質な根底を持つ茶道、それを自分の心の中に取り込んでいる壮絶さを感じずにはおれません。ちなみに右近は徳川2代將軍秀忠がキリスト教徒をフィリピンに追放したとき、全国の信者と共に4隻の船に乗り長崎からマニラへ渡りました。翌年熱病にかかり亡くなり、63才の壮絶な人生を閉じました。

一人の天才が多くの弟子を育て、その弟子たちは庶民に支えられ文化と言う大きな波を作り出してゆきます。その波を為政者たちが利用し、その荒波を庶民は乗り越え新たな文化を生み出してゆく、そんな縮図がこの当時の茶道であったのです。

政治、経済、文化、宗教、その中に翻弄されながらも、輝き、そしてしがき苦しむ、そんな人間の生き様が茶道だったのです。甘さの中でしか物が見られない美感を持つ現代の私たちと大きな違いを感じます。

**初釜** 茶道の稽古はじめは、その年初めて釜を掛けるので初釜と言います。今年は忌中ですので取りやめます。昨年は何か予感したのか、俊浩が初めてお弟子さんの（といっても皆先生に当たりますが）の前で点前をしました。父はこのころから体調を崩していたので、席に出てくることはありませんでした。本当は彼の姿を見てもらいたかったと、今になって思います。初釜の10日前、突然「俺に点



前を教えろ」と俊浩が言い出し、1週間の特訓で茶を点てました。その後彼は駒沢大学を中退、大本山総持寺の修行に入りました。父が導いていたのかとふと考えます。

**松本城茶会** 昨年も花見茶会、市政100周年茶会、月見茶会、10月恒例のお城茶会と、毎週のようにお城に通い、茶を点てました。茶に関わる時間が大分増えたように感じます。習い事の世界はどこも同じだと聞いていますが、表千家も最近急に高齢化し、人数が減り、若い人の稽古離れが進んでいます。私でも若くて動きの軽いほうに属しているため、道具を運んで、場所を選び、道具を置いて、茶を点てられるようにと動き回ります。市の広報に出ますので、お城に来て、ぜひ一服の茶いかがでしょうか。

## 住職の活動

### SVAの常任理事を務めています

私は1980年のカンボジア難民救援で初めて現地を訪れ、日本にはまだ海外救援をする民間団体がないころから活動を続けてきました。当時は政府のやる仕事だから、民間は必要ない、日本にももっと危機的な問題があるのになぜ外国なんだ？との指摘もいろいろあり、活動を充実させながら、組織も作ってゆかなくてはならない厳しい期間を経てきました。それでもSVA（シャンティ国際ボランティア会）は何とか日本の民間団体の中では3本の指に入る団体にまでたどり着きました。そして私は常務理事を勤めさせていただけるようになりました。もっと国際的な勉強や、センスを養う必要に迫られ、苦しいですがやりがいがあり、このように自分を磨く場所に立たせてもらっていることを大変うれしく思っています。



昨年9月今年度の予算を決める会議にアフガン事務所のワヒド副所長が日本を訪れました。3年前アフガンに行って、初めて会ったのに何も違和感なく話せる不思議

な人でしたので、再開を大変うれしく思い、つい話し込んでしまいました。

昨年一時マスコミをにぎわせた、韓国のキリスト教系のボランティアグループの拉致事件について話してくれました。マスコミ報道では彼らを拉致したのはタリバンとのことでしたが、ワヒドさんが言うには、アフガンのタリバンではなく、外国から入ってきたタリバンで、アフガンには関係ない人たちがやっているとのことでした。

アフガンはここ数十年、ロシアとの抗争、独立のための内戦、タリバンの支配、多国籍軍の進攻と戦乱が続きました。どれも皆アフガンが独立しようとする戦いを利用しようとする外国の利権争いが、アフガンを戦争に駆り立てたのです。世界ではアフガンは戦争の国、アフガン人は好戦的というけれども、外国がそう仕向けるから戦争が起こる。ぜひ本当のアフガン、本当のアフガン人のことを知って欲しい、と彼は語っています。

私たちはアフガンに事務所を開設して5年になります。すばらしい優秀なアフガン人スタッフと共に農山村に入り込んで、そこに住む住民と一緒に、学校や図書館、コミュニティセンターを作り、アフガンの昔から伝承されてきた本を作り、伝統的な社会や文化を彼らと共に復興しようとしています。敬虔なイスラム教徒との共同作業は宗教の違いを感じさせません。彼らのイスラム教は本当に穏やかな宗教であると肌で感じます。



一緒に働く中から得られるアフガンの情報と、政府やマスコミから流される情報の違いに愕然とします。日本も様々な視点からの情報を得て、日本独自の考え方を持って世界の平和をそこに住み、その人々と一緒に復興する手段を持たなくてはいけないと思います。それには政府やマスコミばかりでなく、心の交流をしながら共に働く民間の団体を育てていかないと、誤った選択をすることになると思います。

私たちは一切仏教の布教をしません。なぜならその地には、その地の自然や人間や風土に適した宗教があるからです。外国の異質な要素を持つ宗教を持ち込んでも、人々は幸せにはなりません。ちなみに韓国のボランティアグループはキリスト教を鮮明に打ち出して活動したようです。アフガンはまだ情勢が安定していないので、私たちは外に姿を見せません。外国人と一緒に働いていると言うだけでアフガンのスタッフにも危害が及ぶからです。そのルールを守っていれば事件は起こらなかつたはずですが。この事件の後日本人スタッフはアフガンから退去しています。ボランティアの心無い行動が、ボランティア活動をしにくくさせてしまったのです。



## ご葬儀や法事はぜひ全久院で

りらの会のコーナーでもご紹介しましたが、最近お寺でのご葬儀や法事が増えてきました。特に葬儀は一時期ほとんど葬儀社の会館で行われるようになってしまいましたが、また寺に戻ってきています。その理由はイス席になったこと、りらの会など手伝いにより人手がなくてもよくなったことなど外部的な状況が整ったことが上げられると思います。

しかし一番の理由はやはり、お寺という場所が単に葬儀をセレモニーにしないことに皆さんが気づき始めたのだと思います。肉親の死という強い悲しみを、家族同士が助け合いながら儀式を進めてゆく中で、悲しみを癒し、家族のきずなを強めるという役割を葬儀が果たしていると思います。またご先祖様という意識が家を大切にしたり、両親や祖父母を大切にするという意識を子供や孫にもたらすというような心の問題への影響もあります。

またお寺では会場使用料はいただきませんから、葬儀費用も会館を使った場合の半分程度で済みます。車も50台は駐車できますし、葬儀に当たっての手続きをしてもらえる業者を紹介しますので、手間も会館を使うのと変わらず、役所への届出から、通夜の手配、花や供物、あとふきの準備や片付けまで一切合財任せすることができます。

「業者の会館を使って葬儀をしたが、請求書が来たら高くてびっくりした」というお話を時々耳にします。葬儀は急なことですから、即断しなくてはなりません。あれもこれもと準備すると、人手を多く使い、駐車場も広い、料理も、なにもとやっていたら便利であっても費用が膨大なものになるのは避けられません。

費用面のことを含めても、ぜひお寺での法要を考えていただけたらと思います。

## 俊浩 本山奮闘記

私の長男俊浩は現在横浜鶴見、大本山総持寺にて修行しています。入山してすでに10ヶ月が過ぎようとしています。右の写真は昨年6月、面会が許された時撮った写真です。真ん中が俊浩です。清楚でいい表情です。彼のことを知っている方々が、東堂の密葬の時などで彼と話して、「俊浩君は変わったね」とおっしゃいます。本山の修行は食事も少なく、睡眠時間も少なく、プライバシーもない集団生活ですのでかなりきついものですが、大学生活の時より、私が見ても生き生きしているのが良くわかります。またはっきり自分の考えを言うようになりまし、お経の声もはっきりとされていて、大きな張りのある声になりました。来年になると殿行という役につきます。法要の時、お経本を出したり、マイクを出したり様々な動きをしなくてはならない役です。それが済むと少しは修行生活に余裕が出来ると思いますので、この会報誌に本山の様子などを投稿してもらおうと思います。



## 大黒の活動

昨年の10月、松本市政100周年記念の松本城物語で、場面展開のきっかけになる歌を歌う役を務めました。4年前からオペラを企画公演する「オペラを楽しむ会」のアドバイザーをお勤めいただいている方から推薦があり、オーディションを受け、その役をもらいました。

場面展開の時、4回ほどステージに出て歌いました。松本城物語には彼女が教えているコーラスの方など知り合いがいて、フィナーレの後廊下に出て客の見送りの時は、皆に囲まれ「やったね！」とばかりに抱き合ったりと晴れやかな顔をしていました。少しずつですが彼女の声が認められてきたのかな、と思います。寺の仕事の合間、常にイヤホンで自分の歌を聞き、練習している努力と気力には私も脱帽。

また、今年の6月22日オペラを楽しむ会主催でモーツァルトの3大オペラの一つ「ドン・ジョバンニ」のドンナ・アンナ役をやります。他の「魔笛」「フィガロの結婚」はすでに上演していますので、最後一つということになります。このオペラは有名なアリアや重唱曲が満載の、滅びの美学、宇宙の音楽と評される大作です。今年はコンサート形式で、歌を聞かせるだけで、来年オペラとして上演する予定です。長野県内で活躍する声楽家のみで作り出すオペラです。合唱団の指導、練習、打ち合わせなど全て手作りです。市民の有志だけでどこまで出来るか、ぜひご期待ください。また賛助いただける方、チケットが欲しいという方がございましたら、全久院までご連絡ください。



## 掲示板 (皆様のご参加お待ちしております)

### 檀信徒護持会新年総会

例年通り 1月19日(土) 4時より全久院で開催します。東堂の遷化で忌中ではありますが、東堂でしたら「俺にかまうな、日ごろと同じことを、精一杯しろ」というと思います。檀信徒の総会でもありますので、例年



通り開催したいと思います。今年も全久院の催しに参加していただいている方々に集



まっていたいただき、より多くの方に参加していただこうと思います。3時より茶室にて薄茶を差し上げます。檀家の皆様にも堅苦しくなくお茶の雰囲気に触れていただこうと思います。4時より本堂にてお参り、その後座禅会の皆様と5分間座禅、4時10分より護持会総会、4時半より懇親会となります。懇親会ではご詠歌の皆さんと観音講の方によるご詠歌の奉詠

を2曲お願いします。1曲は南こうせつさん作詞作曲の「まごころに生きる」を皆さんで合唱します。次に観音講の皆さんで歌っている唱歌を2曲、みなさんにも歌詞を配り合唱してもらいます。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は1月17日（水）までに電話でご連絡ください。

．．． 座禅会 ．．．

1月26日(土)特別座禅会につき3時から・2月24日(土)・3月22日(土)・4月26日(土)・5月24日(土)・6月21日(土)・7月19日(土)・8月23日(土)

お粥と精進料理、以上が上半期の日程です。毎回夕方4時集合4時40分まで青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、5時45分頃まで座禅、6時まで茶話会という予定で行います。8月23日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただくだけでなく、ものの見方や生き方を豊かにすることができます。ぜひご参加ください。

．．． ご詠歌会 ．．．

2月14日(木)・3月13日(木)・4月24日(木)1時より・5月13日(火)・6月12日(木)・7月10日(木)・8月21日(木)

午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。今年は福島県での全国大会に5月27(火)～29日(木)参加します。会津の飯盛山散策、松島遊覧、磐梯熱海温泉などに泊まります。一緒にいかがですか。

．．． 観音講 ．．．

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱11時20分より食事という日程です。現在15人ほどの参加者があります。気よりが良く60代から90代の方が元気に集まってきます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。